

放射線化学の展開に向けて

地方独立行政法人 東京都立産業技術研究センター

中川 清子



この9月より、平出先生の後を受けて会長に就任いたしました。「化学系学協会連絡会」や「放射線サイエンス連合」等の他学協会との連携担当としての活動を生かして、会の運営に当たるように、と理解しております。

まずは、諸先輩先生方の巻頭言から、学会を取り巻く変遷を振り返ってみます。日本放射線化学会は、56年前の1965年に設立されました。当時の日本の放射線化学研究のレベルは、欧米に大きく後れを取っており、海外の学会との連絡窓口としての役割も大きかったようです。世界の放射線化学をリードしてきたアメリカですが、冷戦が終結した1990年代以降、加速器建設等放射線関連の研究予算が大幅に削減され、アクティビティも低下していきます。一方、中国やインド等を含めたアジア圏では、放射線照射施設の建設が進み、放射線利用分野を中心に放射線化学の研究者が増えています。2006年のアジア太平洋放射線化学会議 (APSRC) のスタートは、活力ある中国・インドとの連携をとるためです。

現在、日本においては、治療用の重粒子照射施設が7か所、放射光施設が10か所、J-PARCを始めとした加速器施設が多数稼働しております。さらに、高輝度軟 X 線放射光施設が2023年度中の運用を目指して、仙台に建設中です。これら治療用以外の施設の多くは、物質の構造解析や素粒子・原子核から宇宙まで幅広い分野での研究に貢献しています。日本放射線化学会は、放射光、レーザー化学、プラズマ化学、原子分子衝突、宇宙科学等、広い分野と関連しているため、放射線関連施設の増加に伴って周辺領域の研究者を取り

込む素地があります。関連分野との融合は、諸先輩先生方の緒言も含め、共通の認識といえるでしょう。実際、放射線化学から始まって、関連分野に研究を広げられた方々は多々いらっしゃいます。しかし、関連分野から始めて、放射線化学に足を踏み入れる方は少ない、というのが現状です。

さて、我々は学会に何を求めて、参加するのでしょうか？ 研究成果の発表の場、研究展開のための情報収集 (ネタ探し)、共同研究先の模索、はたまた知的好奇心を満たすため、といったところでしょうか。いずれにしても、討論会やシンポジウム等の情報交換・交流の場を充実させることが肝要かと思えます。平出前会長時代は、コロナ禍であり、Webでの討論会以外の交流活動がほとんどできませんでした。特に若手の会の活動が停止してしまったことは、残念ながら、学生・若手会員の減少に拍車をかけてしまったように思われます。一方、討論会において、Web会議を生かした海外研究者の招待講演が行われ、企画継承委員会による座談会の開催が検討されるなど、新しい試みも始まっています。コロナが収束する見通しは不透明ではありますが、少しずつ社会活動が元に戻るのではないかと期待できます。今後は、座談会にシンポジウムや若手の会を組み合わせることで、参加者の交流を深めたいと考えます。さらに、関連分野との融合のためには、放射線化学会を知っていただき、イベントに参加していただくかなければなりません。そこで、シンポジウムでは他学会にも関係が深い先生に講演をお願いし、その学会との共催により、放射線化学会にも参加していただくきっかけにさせていただきたいと考えております。

会員の皆様には、周辺の若手研究者への呼びかけを含めたさらなる活動へのご協力・ご参加をお願いいたします。

For the Development of Radiation Chemistry
Seiko NAKAGAWA (Tokyo Metropolitan Industrial Technology
Research Institute),
〒135-0064 東京都江東区青梅 2-4-10
TEL: 03-5530-2660, FAX: 03-5530-2629,
E-mail: nakagawa.seiko@iri-tokyo.jp